

過候は遂算用殘三分二之内を以給人に可遺之事。』とあり、以後時々それに關する規定があつた。

**ハシロコウ** 橋信鶴 金澤の俳人。轉蓬齋とも毛物子とも號した。俳諧を好み、享保十四年歳且帳を上梓した。

**ハス** 蓮 ↓レンコン 蓮根。

**ハスイケ** 蓮池 石川郡長屋庄に屬する部落。日本往生傳に加賀國の一寡婦の家に蓮池があり、花時毎に之を彌陀佛に供養したが、遂にその盛開に當つて歿したとの譚がある。津田鳳卿は之をこの蓮池村のことであらうとしてゐるが、固より確證はない。

**ハスイケサコンシヨウケン** 蓮池左近將監承久三年注進の能登國田數目錄に、『昌知庄内公文職一町、承久二年檢立定、蓮池左近將監』とある。公文は田所の結解をする所であり、蓮池氏は公文職で、これはその職田であらう。但し蓮池氏の居所が何れであつたか明らかでない。

**ハスイケボリ** 蓮池堀 金澤城の堀手にあつて、俗に百間堀と稱した。昔金澤御坊のあつた時蓮を植えた所といふ。富田景周説に、この蓮池があるによつて、その東南の地（今の兼六園西北部）をも蓮池というたが、それはレンチと呼んでこの堀と區別するとある。

**ハスヌマノタタカヒ** 蓮沼の戦 天正十三年二月前田利家の臣村井長頼は越中を侵略せんことを請うた。利家即ち衆を集めて軍議したが、長頼の臣小林大納言屋後太右衛門は、もと越中の産で地理に精しかつたから、蓮沼を燒夷する策を上つた。利家之を容れ、廿四日利家・利長父子は國境に止つて聲援に備へ、

長頼を蓮沼方面に潛行せしめ、翌拂曉火を民家に放ち、敵三百を破つて將に兵を收めんとした。時に成政の配下松根の城代杉山主計、城・端の將河地歳右衛門等、直に來つて長頼に追跡したので、長頼以下皆奮闘して退却した。後廿八日利家、長頼に祿二千石を加へ、翌日利長も感狀を授け、秀吉は報を得て賞詞を與へた。

**ハセイ** 破井 ↓モリヲカハセイ 森岡破井。

**ハセイン** 長谷院 金澤下欠原町にあつて曹洞宗に屬する。山號は大悲山。元和七年瑞雲寺三代關室芳學の開創で、瑞雲寺の塔頭であつたが、安政九年一寺の取扱となつた。

**ハセガハ** 長谷川 鹿島郡小田中領長谷、谷内及び藤井領大谷内の兩谷から流出し、藤井領で久江川に落合ふ。流程三軒許。

**ハセガハガクホウ** 長谷川學方 父覺峰は金澤の町醫師で、公事場等三所御用を勤めて居た。學方はその養子で、初め遊峰とも覺峰ともいひ、亦三所御用の町醫師であつたが、寛政十二年十五人扶持を得て藩の御外科となり、文化四年六月歿。その養子有方、また後に學方といひ、文化四年七人扶持を受け、天保二年五人扶持を加へ、十三年十二月新知百石を賜はつた。

**ハセガハゴエモン** 長谷川五右衛門 本國越前。堀江中務大輔の家臣であつた。後加賀に來り、篠原出羽一孝に仕へ、又横山山城長知に轉じて百五十石を受け、大坂陣に従うてその後役に首三つを得、前田利常から白銀二枚・帷子二を賞賜せられた。

**ハセガハサシエモン** 長谷川三右衛門 本國は尾張。父長谷川越中は織田信秀に仕へ、後信長に仕へた。三右衛門は慶長二年前田利家に仕へて七百石を賜はり、利長の時累進して千二百五十石を受け、旗奉行を勤め、慶長十六年歿。子孫藩に世襲する。

**ハセガハジュンヤ** 長谷川準也 父は與一。歿の孫。初め金澤藩の士官であつたが、明治六年金澤町總區長となり、尋いで製糸・撥糸・銅器各會社を起して士民の困窮を救ひ、尾山神社の神門を建て、廿六年金澤市長に擧げられて百方計豫する所あり、四十年十月十九日六十六歳を以て歿した。

**ハセガハトウエツ** 長谷川等悦 長谷川派の撰師。七尾町舊記に、『宗也等悦（原本等説に作る）信正、俗稱新之丞、寛文七年七月六日卒、西養生願信士、京都寺町通丸太町淨土宗信行寺葬。』と記し、等伯の次子としてあるが、燕靈風雅には等伯の長子を信春、次子を宗也とし、信春の子を等悦としてゐるが、思ふに宗也と等悦とは一人であり、諱は信正であること七尾舊記のいふ如くであらう。又扶桑齋人傳には等伯の庶子として居る。

**ハセガハトウハク** 長谷川等伯 能登七尾の人、長谷川流の撰祖である。七尾町舊記に『法眼長谷川等伯、藤原信通、俗稱文四郎、後改六六、號雪渡齋、京都三條街了願園子居住、能州七尾産、少而好撰、古法眼元信長子師、狩野祐雲宗信學、撰法、名改宗伯。祐雲歿而後、等益成門人、撰道頗入佳境、又改名等伯也。豐臣秀吉爲御繪師、賜知行二百石。蓋大坂御陣六年前、征夷大將軍源家康公御治世後、被召江東、途中頓發病、稍離到江府、著病重而僅經二宿而終卒。行年七十二歳。江戸圓通院葬。法障嚴淨院等伯日妙居士、慶長十五年庚戌二月廿四日。宿坊於京都者、小川頭本法寺塔頭教行院。同於本國二者、能登國七尾（小島）本延寺、本法寺末寺也。』とある。蓋し大坂御陣六年前の文は訝しいが、これは等伯を知り得べき唯一の史料であらう。等伯の撰論を本法寺日通上人の筆録したものは、今も同寺に藏せられてゐる。その冊子は、美濃紙の故紙を裏返しにしたもの、袋綴墨付十九枚で、題簽に『撰説、長谷川等伯記之』とし、又別に享保の頃加へた表紙があつて、それには『撰之説、長谷川等伯撰と記す。叙事九十三條、文章一貫せぬが、之に據つて等伯の抱懐が知られる。日通は泉州堺妙國寺日珙の門下で、天正十四年本法寺に入り、慶長十三年五十八歳で示寂した。

**ハセガハトウヨ** 長谷川等譽 長谷川流撰師で能登の人。等伯との關係を明らかにせぬが、今羽咋郡妙成寺に藏する六曲屏風松杉圖がある。又同寺藏信春筆涅槃像の圖を模寫して、『慶長四年七月二日長谷川等譽是寫也』と記したのも、鹿島郡小島成蓮寺に藏せられる。等譽の物故は同小島本延寺の過去帳に寛永十三年正月二十六日とせられる。

**ハセガハトウヨウ** 長谷川等養 享保頃の

改六六、號雪渡齋、京都三條街了願園子居住、能州七尾産、少而好撰、古法眼元信長子師、狩野祐雲宗信學、撰法、名改宗伯。祐雲歿而後、等益成門人、撰道頗入佳境、又改名等伯也。豐臣秀吉爲御繪師、賜知行二百石。蓋大坂御陣六年前、征夷大將軍源家康公御治世後、被召江東、途中頓發病、稍離到江府、著病重而僅經二宿而終卒。行年七十二歳。江戸圓通院葬。法障嚴淨院等伯日妙居士、慶長十五年庚戌二月廿四日。宿坊於京都者、小川頭本法寺塔頭教行院。同於本國二者、能登國七尾（小島）本延寺、本法寺末寺也。』とある。蓋し大坂御陣六年前の文は訝しいが、これは等伯を知り得べき唯一の史料であらう。等伯の撰論を本法寺日通上人の筆録したものは、今も同寺に藏せられてゐる。その冊子は、美濃紙の故紙を裏返しにしたもの、袋綴墨付十九枚で、題簽に『撰説、長谷川等伯記之』とし、又別に享保の頃加へた表紙があつて、それには『撰之説、長谷川等伯撰と記す。叙事九十三條、文章一貫せぬが、之に據つて等伯の抱懐が知られる。日通は泉州堺妙國寺日珙の門下で、天正十四年本法寺に入り、慶長十三年五十八歳で示寂した。